WAMの働きとNPO法人

長崎国際大学　学長　潮谷 義子

NPO法が制定されて10年。

制定当時には〝行政の下請け活動〟、〝ボランティアとどこが違うのか〟或いは〝メリットは？〟と喧(かまびす)しい論議もあった。

この間のNPOの活動実態には、質的なバラツキがあったことは否定できない。

その一方で、今日の経済、社会、政治、人間、自然環境等から生じている問題構造や社会変革にNPOとして柔軟に対応し、新しい活動を展開しているところもある。NPO法人同士が連携し多様な地域住民のニーズにワンストップで対応したり、わずかの人数で継続的に、必死に、企業も行政も取り組まない領域で活動しているところもある。とても良い活動と傍目に見えるNPO法人には率直で、素朴で、人権に根差した対等意識を発揮しているところも少なくない。

私もこんな経験をした。

名刺交換の後、「みなさん、町おこし活動をされているのですね」、すかさず「我が町は眠っていません。町おこしの必要はないのですが、町の存在アピール、活性化に苦労しているメンバーです」と切り返された。マイッタ、マイッタ。

たまたまあるところのNPO法人と交流しているときに、マイクから「限界集落に暮らす皆さん方…」と呼びかけがあったトタン野次が飛んで「誰がここを限界集落と命名した？住んでるものは限界集落なんておもってない」と。ナットク、ナットク、そのためのNPO法人と言いたかったのでしょう？

■ オピニオン

同時に志も高く、営利目的ではなく心からNPO法人運営に情熱を傾けてきた人々が、その責任、専門性、組織性、財政基盤の弱さのなかで解体せざるを得ない状態に追い込まれた事例があることも忘れてはならない。

この8月初旬、私は独立行政法人福祉医療機構（WAM）の基金助成を昨年受けたNPO法人にヒヤリングに出かけた。

清潔な住空間、笑顔のこぼれる生き生きとした表情、大きな声で〝おはよう。〟…各々障がいは異なっていても皆さん小規模作業所に満足されていることが伝わってくる。

NPO法人の責任メンバーは、申請した助成金で購入したコンベクションにより、パン焼き、ヤ*ーコン茶、乾燥ヤーコンづくり、さらには通所してくる障がい者の給食づくりと活用が広がっている事実を話された。助成された金額は小規模作業所の将来の安心の保障を為したことが喜びと共に伝わってくる。

「長寿・子育て・障害者基金」の助成事業は、政府から出資された原資を基に民間の創意工夫をいかし社会福祉の振興を促すことが期待されている。また、その事業が普遍性を持ち、多くの人々、多くの地域の中で展開される可能性が期待されている。そのために、委員は助成申請された事業の審査、決定後の評価分析を多角的に検証する必要がある。

WAMの助成事業はNPO法人の「これからの歩み」とも有機的に連携していくことになるだろう。

もちろん、NPO法人は、公的な機関の資金依存型であってはならないことを当然としつつ、企業や行政と対等の立場でパートナーシップを組む一方、高い民間性の発揮、自立型として活動し、利益追求に勝るNPOとしての活動目的、価値の追求がその設立の根底にしっかりと存在してこそ、社会の多様なニーズに応える発展が期待できると考える。

*ヤーコン…アンデス地域に特産するキク科の多年草。キクイモに近縁で、ダリアに似た塊根にフルクトオリゴ糖を含み、食用。日本でも栽培（広辞苑　第六版）。

「WAM（ワム）」は、福祉（Welfare）と（And）医療（Medical service）の頭文字をとって名づけられた、独立行政法人福祉医療機構の略称です。